

# シリーズ ひと ～現場に生きる～ 第7回

うめざわ  
梅澤

みつひこ  
光彦さん、

そがめ  
十亀

けんた  
謙太さん、

きむら  
木村

しょういちろう  
翔一郎さん

福島町

中塚建設(株)

工事部



福島小学校の子どもたちが描いた絵をデザインした2代目キリンクレーンの車体の上で（左から）梅澤さん、十亀さん、木村さん

道南地域で、“キリンのクレーン”でおなじみの建設会社が福島町の中塚建設(株)です。同社は20年以上前から、所有する重機にキリンやトラなどの動物の絵柄をペイントしています。動物に見立てた重機が工事現場にあることで、周辺の住民が建設業に親しみを感じるきっかけになっています。また、重機に目玉が付いていることで、監視されている印象や周囲に立ち入らないという意識につながり、工事現場の安全対策にも一役買っています。

中塚建設で動物の重機たちと一緒に働く、梅澤光彦さん、十亀謙太さん、木村翔一郎さんに会いに行ってきました。

## 年代を超えてのコミュニケーション

福島町出身の梅澤光彦さんは、3人の中で最年長の50歳。函館の職業訓練校で溶接を学び、卒業後は道外で出稼ぎをしていましたが、地元に戻ってきたときに中塚建設に勤めている知人の紹介で、同社の作業員として働くようになりました。「仕事をしているうちに、

重機の恰好よさに憧れて、運転手になりたいという夢を持つようになりました」と梅澤さん。大型免許の資格は持っていましたが、入社後にもいろいろな資格を取得し、今では中塚建設で所有する重機のすべてを運転できます。工事現場でキリンのクレーンを駆使しているのも梅澤さんです。

梅澤さんの思い出に残っている仕事のひとつが、町内吉岡地区にある新平和橋の架け替え工事。約50年前に架けられた橋をいったん壊し、橋台から造り直すという大工事でした。「一貫して携わったという意味で、印象に残っています」と言います。

その現場を一緒に担当したのが、入社4年目の十亀謙太さんです。函館市出身の十亀さんは函館工業高校の電気科を卒業後、首都圏にある大手の鉄鋼メーカーに入社し、ガス管の埋設工事などを担当していました。その中で、建設業への関心が生まれ地元に戻りたいという思いも重なって、知人の紹介で中塚建設に入社することになりました。

「どうせやるなら管理する側になりたい」と、今年

2月に2級土木施工管理技士の資格を取得。現在、担当している現場では週休2日制の導入など、働きやすい現場づくりにも努力しています。「新平和橋の架け替え工事のころは、まだ一人で現場管理ができない立場だったので、見習いとしていろいろな現場を体験しました。光彦さんには教わる人が多いです」と十亀さん。親しみを込めて「光彦さん」と呼びかける姿に、年代を超えてしっかりコミュニケーションが図られている現場の空気を感じました。

### キリンのクレーンが建設業を選ぶきっかけに

最年少の木村翔一郎さんは入社3年目。地元の福島商業高校を卒業後、中塚建設に入社しました。「機械や車が好きで、小学生のときからキリンクレーンをはじめ動物の重機がある現場を回って写真を撮っていました。小学3年生のときに社長の自宅に行って『将来は中塚建設に入社したい』と直談判しました」と言う木村さん。願いが叶い、今は作業員として仕事をしながら、2級土木施工管理技士の資格取得を目指して勉強をしています。

キリンのクレーンは1999年から福島小学校の写生会に“招待”され、モデル役を務めています。初代のキリンクレーンから運転を担っている梅澤さんも「翔一郎が写生会にいたことも、よく現場にきていたことも覚えています」と笑います。「入社後は社員の皆さんの名前を覚えるのが最初の仕事だと思いますが、僕はほとんどの人の名前を知っていたので、全然苦じゃなかった」と木村さんも笑います。

これまでずっとキリンのクレーンを操作してきた梅澤さんは、「今はキリンクレーンも2代目になりましたが、最初のころは正直言うと恥ずかしかった（笑）。でも、子どもたちに写生会で描いてもらうようになって、地域の皆さんにも注目されるようになって、だんだん自信になってきました」と言います。十亀さんも「私は管理する立場なのでクレーンなどの重機を扱うことはないのですが、ちょっと憧れます。自分で操作してみたいという思いもあります」とうらやましそうです。

また、昨年新たに購入したユンボクレーンの絵柄デザインは、木村さんが担当しました。「ちょうど重機の買い替え時期だったので、『僕がデザインするから買ってください』と提案しました。いつか自分でデザインしてみたいと思っていたんです」と目を輝かせます。取材で中塚建設の重機について質問を投げかけると、答えてくれるのはほとんど木村さん。所有する重機の話は、すべて頭の中に入っているのです。現場で撮影した動物柄の重機の写真を自身のインスタグラム(写真に特化したソーシャル・ネットワーキング・サービス)に掲載しているそうで、「世界中のオベさん(重機を操作・運転する人、オペレーターのこと)から“いいね”がきます」とうれしそうに話してくれました。

### 中塚建設が発祥、安全対策の“目玉シート”

中塚建設が所有する動物柄のクレーンには、すべて“目”があります。中塚建設では、目玉のある重機は監視されている印象を与え、その空間に立ち入らないという意識につながり、安全対策の一環になると感じていました。同時に、建設現場の周辺住民の皆さんが建設業に親しみを持つきっかけになることも実感していました。そこで、これまでの経験と成果を建設業の多くの人たちと共有していきたいと、昨年度、中塚徹朗社長の発案で、(一社)函館建設業協会の労務安全委員会が主導し、マグネット式の日玉シートを作成しました。その目玉シートを会員と準会員に無償配布し、道南の工事現場では目玉シートを貼り付けた重機が登場しています。

目玉シートを貼り付けた重機を配置した現場関係者などに、その後の変化を質問したアンケートでは「視線を感じて安全への注意を促したと思う」との回答が



中塚建設ではセーフティベストにも目玉を付けて、注意喚起を促している



中塚建設の創立50周年で集合した動物柄の重機たち（2014年撮影）

58.0%、「稼働中の重機の死角に入ることを防ぐ効果があったと思う」との回答が44.0%もありました。また、「職場体験の高校生が関心を持った」、「子どもたちが重機を見て楽しそうにしていた」など、将来の担い手確保につながる一助になったという声も聞かれています。今年に入ってからは、愛媛県の建設会社から問い合わせがあり、道外にも目玉シートが広がっています。

その発祥が中塚建設であることは、3人にとってうれしい出来事だったようです。「うちでは重機には目玉が付いているのが当たり前」と胸を張る梅澤さん。十亀さんは「動かない機械でも発電機に目玉を付けたり、工事中の表示旗に目玉をデザインして注意喚起を促しています」と現場での活用法を教えてくださいました。一方で、「目玉のついた重機が各地で普及したら、それが当たり前になってしまうので、その後はどうするのか。常に新しいことを考えながら、しっかり現場の管理と安全対策をやっていききたい」と、現場を任される立場になった十亀さんは、改めて気持ちを引き締められています。

### 地域住民が安全に暮らせるために

最後に3人に仕事の醍醐味とこれからの夢を聞いてみました。「道路をつくれれば、それを使ってくれる人がいる。僕たちのつくったものが、地域の皆さんの生活に役立っているということが、この仕事のやりがいです」と木村さんは言います。一方、十亀さんは「前職は埋設管などの仕事を中心だったので、目に見えるものをつくる楽しみがあります。また、災害が起こらないように地域の皆さんのために行う工事は、特にやりがいを感じます」と真摯な表情で語ってくれました。

2014年1月に福島町岩部地区の道道で起きた土砂崩れで復旧作業に従事した経験がある梅澤さんは「災害の復旧作業の現場では、この仕事の大切さを実感しま

す。災害が起きたら、まず現場に向かうのはわれわれ。通行できるように迅速に道路を復旧させるなど、本当にやりがいを感じる一瞬です」と、当時を思い出しながら話してくれました。「事故なく、中塚建設で仕事を全うしたい」と将来に向けて控えめな梅澤さんですが、これからは後輩の指導役も期待されています。「できるだけたくさんの重機を乗りこなせる運転手になることが夢。今はバックホーの運転がほとんどですが、クレーンの免許を取って上手に乗りこなせるようになりたい」という木村さんの夢を支えて、キリンのクレーンを次の世代につなげていってほしいと思います。また、現場を任される役割の十亀さんは「まずは1級土木施工管理技士の資格を取ること。そして、自分の現場では絶対事故を起こさないという強い気持ちで仕事をしています。このことをしっかり胸に刻んで頑張っていきます」と決意を新たにしています。

中塚社長が子どもに喜んでもらいたいという思いから導入した動物柄の重機。安全対策や建設業に親しみを持ってもらえるきっかけになるだけでなく、社内のコミュニケーションづくりや円滑な現場運営、そして社員の成長や地域の皆さんのためになりたいという思いを醸成するためにも一役買っているようです。



現場で活躍していた初代キリン（2013年撮影）

※中塚建設については、『開発こうほう』2015年12月号の座談会記事「地域とともに生きる建設業」もご参照ください。